

## 17 本学歯科技工士学科における学生の異動実態 —休・退学および留年の実態と今後の課題について—

○相馬 泰栄, 中澤 孝敏, 植木 一範  
(歯科技工士学科)

【はじめに】 本年は明倫短期大学歯科技工士学科が1997年に開設されて10年目にあたる。この間、学生個々の異動状況は学科会議で報告されてきたが、異動実態は統計的に検討されていない。10周年を機に、これまでの学生指導を振り返り、今後の指導のあり方を探るため、学生の異動実態（休学者・退学者・留年者）について検討した。

【対象および方法】 1997年度から2004年度までに本学科に入学した458名を対象に2006年3月までに異動のあった休学者・退学者・留年者の動向を学年別、男女別、通学形態別、入試形態別に実態を調査し、比較検討した。ただし、2005年度・2006年度入学生については現在、本学科に在籍中のため、検討資料の都合上除いた。

【結果および考察】 本学科における休学率は3.1%、退学率は9.6%、留年率は2.4%であった。休学の主な理由は進路選択の不適切、退学の主な理由は進路選択の不適切と学業不振、留年の主な理由は出席日数不足と学業不振

であった。

- 1) 学年別の休学者、退学者、留年者とも1年次に集中した。
- 2) 男女別の退学率・留年率は男子が女子より高く、休学率では男女別の差異はなかった。
- 3) 通学形態別の退学率は自宅通学生が退学者全体の68.2%と高い値を示した。
- 4) 入試選抜別の退学率は公募推薦入試者が他の入試選抜者より高い値を示した。

以上の結果から、休・退学者の多くは受験の段階で歯科技工の本質の理解が不十分のまま受験、入学したことが一因であることがわかった。さらに、学生の学力、適正などの問題もあげられるが、これらの問題は多因子により構成されており、今後さらに調査を継続し、要因を明確にして解決しなければならない。入学前にオープンキャンパスなどで歯科技工の職業を深く理解させるとともに夢を持たせる努力も必要であると考ええる。

## 18 本学歯科衛生士学科における入学時・在学中・卒業時の成績推移 —入学時基礎学力調査との関連—

○平澤 明美, 渡辺 美幸, 佐藤 裕子, 小黒 章, 福島 祥紘  
(歯科衛生士学科)

【はじめに】

歯科衛生士教育は、知識と技術の両面からの教育であるが、近年入学後、学力不足や学習意欲の減退により、退学や歯科衛生士試験不合格の結果となる者が増えてきた。そこで、本学科学生の10年間の成績から、入学時、在学中と卒業時の成績の関連を明らかにし、今後の学生指導にどのように活用すべきかを検討した。

【対象および方法】

平成9年度から16年度に入学した学生を対象に、在学中の成績は1学年総合、2学年総合、卒業試験、模擬試験の成績とし、卒業時の成績は歯科衛生士試験（国家試験）自己採点の結果とした。また、入学時成績は平成16～18年度入学生を対象に実施した、入学時基礎学力調査の結果とし、各項目を調査比較した。

【結果および考察】

(1) 卒業時すなわち国家試験自己採点結果は徐々に下降傾向を示し、平成9年度入学生と平成15・16年度入学生の間には明らかな差が認められた。

(2) 国家試験自己採点結果と前述の在学中の成績の間には、高い相関が認められた。

(3) 平成16年度生の入学時基礎学力調査結果と国家試験自己採点結果の間には、比較的高い相関 ( $r=0.5342$ ) が認められ、平成16年度生からの3年間の入学時基礎学力調査結果は、年度毎に低下傾向を示した。

以上の結果から、本学科学生は卒業に近づくに従い学力の向上が認められるが、平成16年度入学生までの過去8年間の学力（国家試験自己採点結果）は下降傾向にあり、在学中の学生も入学時基礎学力調査結果から、この傾向は継続していると推察された。今後は、入学時基礎学力調査の結果を学力向上に活用できるよう検討を重ねたい。